

令和7年度 公益財団法人納税協会連合会会長賞

万博と税金がつくる未来

奈良県立奈良高等学校 1年 児玉 一華

今、大阪・関西万博が開催されている。私はニュースや授業でその話題を耳にするたびに、未来の社会を先取りできる大きな舞台だと感じていた。最新の技術や世界の国々との交流を通じて、人類がこれから進む道を考えるきっかけになるからだ、しかし、華やかなイメージの裏側には、多くの人の力と、そして「税金」という社会全体の支えがあることを忘れてはならないと思う。

万博会場の建設やアクセス道路の整備、警備や医療体制の充実といった準備には、膨大な費用がかかる。それらの一部は私たちの税金でまかなわれている。税金があるからこそ、安心して世界中から来場者を迎えることができ、日本の魅力を発信する大規模イベントを実現できるのだ。もし税がなければ、入場料や企業の資金だけで万博を開催するのは難しく、多くの人に参加できない限られた催しになってしまうだろう。さらに、万博のために整備された道路や鉄道、インフラは、開催が終わったあとも地域の人々の生活に役立ち続ける。

つまり、税金は「一度きりの出費」ではなく「未来への投資」として機能しているのだ。私はこの点に、税の本当の価値が表れていると思う。考えてみれば、私が通う学校や地域の図書館、公園なども税金で支えられている。もし税がなければ、安心して学び、遊び、成長できる環境は整わなかったに違いない。万博は特別な例に見えるが、実は日常生活の延長線上にある。私たちは普段の暮らしの中でも常に税の恩恵を受けているのだ。

一方で、税金がどのように使われるのかについては、社会全体で意見が分かれることもある。万博にかかる費用が妥当なのか、他の福祉や教育にもっと回すべきではないか、といった議論も耳にする。しかし、こうした議論こそが、民主主義社会における「税の使い道」をみんなで考える大切な場になっているのではないか。私は、納税者の一人として将来この議論に参加し、自分の意見を持てるようになりたいと思う。

万博は「いのち輝く未来社会のデザイン」というテーマを掲げている。その実現を支えているのが税金であり、そこには国民一人ひとりの思いが込められている。私は万博を通して、税金が単なる支払いではなく、未来を築くための共同の力であることを学んだ。そしてその力を次の世代につなぐ責任が、私たちにもあるのだと感じている。税金があるからこそ、私たちは夢を共有し、世界とつながり、未来を描くことができる。万博はその象徴だ。私はこの経験を通じて、「税は未来への扉を開くカギ」であることを胸に刻みたい。